



220号

2017 / 1 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



明けましておめでとうございます

跳舞 嘉絨藏族(ギャロン・チベット族)が住んでいる丹巴では、伝統的な舞踊を総じて「跳舞」と呼びます。当地を代表するゴージャン(古くから伝わる民間舞踊)も含めて、踊りの中に跳躍が多く取り入れられていることに由来します。この写真はお寺の奉納舞踊に出て来る「跳舞」の場面の一つです。(四川省丹巴、2012年02月撮影)

大川健三(四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問)

‘わんりい’2017年1月号の目次は24ページにあります

明けましておめでとうございます。

2016年に新年のご挨拶をしたのは、つい先日だったような気がします。もう一年が経ってしまったのです。歳をとると、一年が短く感じられるとはよく言われることで、私もずっとそんな認識をもって過ごしてきましたが、最近のスピードは、そんな認識でもついて行けません。ひょっとして、天体の運行が速くなったのではないかと思ってしまう。

そんな個人的な感覚とは関係なく、2016年は去り、2017年がやって来ました。今年こそは、あまり大きな事件や天変地異がない、平穏な一年でありますようにと祈らずにはおられません。

一年が早く過ぎ去ると感じるたびに、私は、北京のお年寄りが、最近の20年をどの様に感じておられるのか、一度じっくりと伺ってみたいと思いたいますが、未だにその機会に恵まれないので、想像するしかありません。何か別世界を見ているようだと感じておられるのでは、と推測します。

21世紀が始まった頃の北京は、日本と比べると、市民の生活やインフラは30～40年、ものによっては50年近くも遅れているようでした。市の中心部には、ソ連の技術で建てたと言われる、大きな堂々とした建造物がありましたけれど、市民の住居は、低層のアパートがほとんどでした。道路はさすがに、広くて歩道もゆったりとしていましたが、敷き詰めたコンクリートブロックは凸凹で、中にはぐらぐら動いているのもあって、そんなブロックを踏むと、雨上がりに、下に溜まった泥水が跳ね上がってくることもありました。

広い道路ですが、走っているのは、バス・各種公用車がほとんどで、自家用車は見かけませんでした。その代わりに、朝夕の通勤時間帯には、おびただしい数の自転車が広い車道を走り壮観でした。地下鉄も、1号線と2号線があるだけでした。

しかし、北京市のインフラ整備の計画は、この時既に出来上がっていたようです。一旦工事が始まると、その工事の完成を待たず、すぐ次の工事が始まって、

建設ラッシュが続きました。私がよく通った中間村大街(大通り)では、環状4号線が下を潜る工事が概ね完了した頃、引き続き地下鉄工事が始まって、長い間渋滞に苦しめられました。丁度その頃から、自家用車が増え出して、渋滞に拍車がかかりました。私が経験した一番ひどい渋滞は、清華大学から北海公園まで、バスで3時間半、ほとんど4時間近くかかりました。現在の様に地下鉄はありませんし、(その地下鉄工事で渋滞しているのですから)タクシーに乗っても道路が混んでいるので動きが取れません。皆、諦めて乗っているしかありませんでした。

それでも、北京の道路や地下鉄の工事は早いんですね。中国には私有地が無いので、用地買収などと言う面倒な手続きは必要ないのです。対象になった人々の側には様々な問題が発生しますが、工事の進捗と言う観点から云えば、日本の担当者にとっては夢のような状況だと思います。それで、今では環状道路は7号まで完成し、地下鉄は計画が17号線まであって、8割方出来上がっています。

その間に、携帯電話や自家用車の普及も急ピッチで、今では日本と同じように、ある面では日本以上に便利になりました。北京は、この20年の間に、日本より遅れていた40年に追いついたこととなります。

日々の生活も、毎朝市場で、野菜や肉・卵・果物などを好きなだけ選んで、量り売りで買っていたのに、大型スーパーが進出して来て、買い物はスーパーで済ませる人が多くなりました。初めのうちこそ、スーパーでも生鮮食品は量り売りで対応していましたが、今では完全にパック販売をするところがほとんどです。そのせいで、あちこちの市場が消えていきました。この変化は、必ずしも便利になったとは言えないのですが、時代の趨勢で、仕方のないことなのでしょう。

このような慌ただしい変化を、私は外側から興味深く見ましたが、渦中に生活する人々は、どう感じたのでしょうか? 北京のインフラ整備も一段落したようですから、2017年が、北京の人々にとって落ち着いた、良い年になるように心から希望します。

Wén zhì bīn bīn rán hòu jūn zǐ yě
文質彬彬，然後君子也ぶんしつひんびん しか のちくんし
文質彬彬として、然後君子なり〈雍也第六〉うえだ あつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

「巧言令色、鮮し仁」〈学而第一〉という言葉が示すように、言葉巧みにうわべを飾るだけで中身を伴わない、そういう人間を孔子は極端に嫌っていました。「巧言は徳を乱る」、巧い言葉は道德心を乱すものだ、とまで言っています。それとは逆に、少々荒削りで口下手であっても、真心のある人が大好きでした。「剛毅木訥、仁に近し」〈子路第十二〉が、そのことをはっきりと示しています。しかし指導者たる人物に対する客観的な評価基準となると、話はまた別です。

『論語』に「質勝文則野 (Zhì shèng wén, zé yě)」(質、文に勝れば則ち野なり)〈雍也第六〉という言葉があります。「質」とは本質、実質、いわゆる中身のことです。「文」とは文飾、文辞、いわゆる外見のことです。質が文に勝るということは、中身が充実していても、外見がそれに追いつかないということです。「野」は野卑、荒削り、野人ということです。野人はもともと孔子の好みでした。

しかし、これは背後に組織の指導者たる「君子」を想定した上での言葉です。つまり中身に外見が伴わなければ指導者とは言えない。いくら人間的に優れていても、ただそれだけでは君子にはなれない。出る所に出ればそれなりに格好を付けなければならない、というわけです。

しかし格好だけでも困る。これに続く言葉は「文勝質則史 (Wén shèng zhì, zé shǐ)」(文、質に勝れば則ち史なり)です。「史」とは何か、いろいろな解釈がありますが、この時代、文書係の役人のことを史官といっていました。これにはある程度の学問と教養が求められますが、組織を率いる指導者

ではありません。孔子はこういう人たちを形容して「史」と称したものと思われます。いくら言葉や文章が巧みでも、中身を伴わなければ単なる記録係のようなものだと言っているわけです。記録係が悪いというわけではありません。指導者としての条件を問うているだけのことです。

そして孔子は最後にこう付け加えます。「文質彬彬，然後君子也 (Wén zhì bīn bīn, rán hòu jūn zǐ yě)」(文質彬彬として、然後君子なり)。文と質が程よく調和して、始めて指導者と言える。「彬彬」とは、調和が取れて美しいさまです。

孔子の弟子で雄弁家の子貢は、このことを面白い言葉で比喻しています。「虎豹の鞞は、猶、犬羊の鞞のごとし」〈顔淵第十二〉。あの美しい高価な虎や豹の毛皮も、毛の部分を取り除いて、皮の部分だけを残せば、犬や羊の皮と同じようなものになってしまうのではないかと。鞞とは、毛の下に隠れた地皮のことです。毛を外面に例え、地皮の部分を中身に例えています。これは、何事も「質」こそが大事で、「文」はどうでもよいのではないかと、と言った人に対して答えた言葉です。つまり、いくら素晴らしい中身であっても、外面が醜ければ意味をなさないということです。

今でも、暴言や失言を繰り返して問題になった後、真意はそうではなかった、言葉が足りず、誤解を与えてしまった、と言いつける「指導者」の姿を、テレビなどでしばしば目にします。仮にそれが誤解であったとしても、孔子や子貢だったら、このような「指導者」のことを何と評したでしょう。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

「黄鶴楼」

報告：花岡風子

今日は崔顥の「黄鶴楼」という有名な詩でした。黄鶴楼は武漢にある名勝の一つで、長江と漢江という2つの大河が丁字型に交わる、水上交通の要所にあります。今は山の上に聳え立つ巨大な建造物になっていますが、この詩が書かれた唐代の昔は長江のほとりに寂しげに立つ二階建て程度の、こじんまりした建物だったようです。

ここでは、古くから人の往来が多く、多くのドラマを生んだ出逢いと別れの場でもありました。黄鶴楼を題材に五百人を超える詩人が七百首もの詩を詠んだ場所でもあるそうです。「黄鶴楼」をキーワードに、『唐詩選』顔負けのアンソロジー¹⁾が出来る程、いわば漢詩のメッカ的な存在です。

「黄鶴楼」と題した詩では、崔顥のこの作品が最も有名だそうです。ところが作者の崔顥は唐代詩人としては、ほとんど知られていない、存在感の薄い詩人です。李白や杜甫と違い、若くして科挙の試験に合格したという類稀なる優秀な素質を持ちながら、飲む、打つ、買うというワル三拍子の性癖の為、出世もままならず、戯れ歌ばかり作り、どちらかというとかバカにされていた詩人だったそうです。しかし、晩年改心したのか、マトモな詩を書き始め、この詩を残しました。この一首だけで、1,300年の歴史に名を残すことになった、言わば植田先生曰く「一発屋詩人」の一人です。

七言律詩の型式にもかかわらず、前半四句は唐代以前の古体詩の様な型破りのスタイルを取り、後半四句は、ビシッと近体詩の型で決めているという面白い特徴を持つ詩です。

七言律詩は二句を一聯として、合計、八句、四聯で成っています。二句一聯毎に場面が変わっていくのですが、最初の場面は、昔の伝説の引用から始まります。

huáng hè lóu
黄鶴楼 作者：崔顥

xī rén yǐ chéng huáng hè qù
昔人已乘黄鶴去
cǐ dì kōng yú huáng hè lóu
此地空余黄鶴楼
huáng hè yī qù bù fù fǎn
黄鶴一去不复返
bái yún qiān zài kōng yōu yōu
白云千载空悠悠
qíng chuān lì lì hàn yáng shù
晴川历历汉阳树
fāng cǎo qī qī yīng wǔ zhōu
芳草萋萋鹦鹉洲
rì mù xiāng guān hé chù shì
日暮乡关何处是
yān bō jiāng shàng shǐ rén chóu
烟波江上使人愁

その昔、仙人が壁に黄色い鶴の絵を描くと、それが本物の鶴になり、やがて仙人はその鶴に乗って天に昇ったという有名な話もありますが、そのほかにも多くの謂れを持つ黄鶴楼から、ボンヤリと辺りを眺める詩人の連想は、過去の伝説の世界へと飛んでいきます。

第二場面では、黄鶴が飛び立った空を見上げると青い空に白い雲が広がり、黄鶴の姿はすでに無い。ここで悠久の歴史と広大な空という時間と空間が一気に交錯します。

第三場面、晴れた空から視線を下ろすと、眼前に対岸の町漢陽の樹々の緑が広がり、更に視線を下ろすと、眼下を流れる長江の中洲に春草が青々と茂っているという情景と共に、詩人の思考は今現在へと向かいます。鬱蒼と茂る春草から、屈原を偲んだ『楚辞』の一句が念頭をかすめ、詩人の胸には旅に出たきり、帰ってこない人を連想。思えば、まるで浮き草のようだった自分の半生がそれ

に重なる…。

第四場面、次第に日も暮れてゆき、「ああ、自分は帰るべき故郷の方角すら分からない」という虚しさが広がり、更に川面に夕靄が立ち込めていく中で、詩人の心に寂寥と望郷の念が迫る…という内容です。

「川べりにたって夕暮れの景色を眺めながら、オレの人生いったい何だったんだ？なんて、コレはもう演歌の世界ですねえ。古賀政男が作曲したらどんな歌になるんでしょうね。昭和歌謡の世界に浸る感じですかね」

と、植田先生のコメントに一堂どっと笑いの渦。このような植田先生にしか語れない面白いコメントがこの漢詩の会の最大の魅力です。

さらに今回、植田先生はこの詩に特別な思い入れがあるというご自身のエピソードもお話し下さいました。それは若かりし頃の植田先生がまだ定職がなく、ある女子高の国語の臨時講師として教壇に立たれていた当時、教科書に太宰治の短編小説「竹青²⁾」が載っていたそうです。この小説は中国の怪異小説集『聊齋志異』の中の同名の一話を翻案した作品ですが、その小説の中で、この「黄鶴楼」の第3聯と第4聯が引用されているのが、妙に印象に残ったそうです。

太宰治はこの作品に非常に自信があったようで、中国人に訳してくれと見せたところ、この作品は日本で発表されるよりも前に中国で雑誌に載ったという逸話もあるそうです。

太宰治と中国古典という、また面白いテーマが浮上りました。それにしても、過去の日本の教養人がごく当たり前に親しんできた中国古典の世界が、今現在、どんどん日本語の中から忘れられ、消え去ろうとしていることを残念に思います。

中国の古典に親しむことは、日本語をより豊かに格調高くする為にも必要不可欠だと、私個人としては思うのですが……。そして、詩人一人一人の個性と歴史性に満ちたドラマがふんだんに盛り

込まれた豊かな漢詩の世界も、日本人の心を豊かにしてくれる教養の一つとして大事にしてほしいと思います。

ということで今回は「ちょいワルオヤジ、会心の作」的な作品でしたが、人生、散り際に至ってもまだまだ輝ける希望はある、この崔顥、ある意味、中高年にとっては希望の星かもしれません。

■注

1) アンソロジー：多くの場合、主題や時代など特定の基準に沿ったものが複数の作家の作品から集められたもの。(万葉集、古今和歌集、唐詩選など)

(Wikipediaより)

2) 竹青：本作品の末尾に「自註。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である」とある。太宰自身が書き記していた「創作年表」の「昭和二十年」「正月号」の項に、「小説(漢文/竹青)大東亜文学30」とあるため、1945年1月、中国語訳版「竹青」が『大東亜文学』(電報通信社)に発表されたと考えられていた。掲載誌が発見されてないため、翻訳はされなかったのではないかという説も強い。

太宰が本作品を書くときに拠った本は、『聊齋志異』(北隆堂書店、1929年、田中貢太郎訳・公田連太郎註)である。

(Wikipediaより)

※編集部注：キーワードを「太宰治 竹青」でネット検索すると、青空文庫(インターネット上の無料電子図書館)で「竹青」の全文が読める。

http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1047_20130.html



8月27日(土曜日)の朝が来た。大連に来て4日目である。本日もまた抜けるような青空である。今日は桜美林大学の留学生であった“于士淇”さんと長春で再会する日である。彼女は昨年卒業し、今は生まれ故郷の長春に帰って就職している。日本語は読み書きとも素晴らしい。彼女も一人っ子なのでご両親は手元に置きたかったのかもしれない。大連に出発する前に〈微信(中国版LINE)〉で大連旅行をする旨を伝えると、「是非長春に来てください。案内したいところがあります。」ということで長春への旅を予定に組み込んだ。長春は、大連で仕事をしていた2年間で2度行ったことがある。有名な観光名所、例えば偽満州国皇宮博物院、旧日本軍が建てた建物群、南湖公園、李香蘭が主演の映画を数多く製作した撮影所などである。彼女の言う案内先はまだ行ったことのない「浄月潭」であったので楽しみにしていた。

長春には「高鉄(中国版新幹線)」に乗って行ったが、高鉄の印象について述べておきたい。私の乗った大連駅発の高鉄は9時15分発で途中5駅に止まり長春駅には12時48分に着く予定である。“予定”としたのは中国のあらゆる交通機関はおおよそ定刻通りに運行しないからである。3年前ハルビンに行った時、定刻前に出発した高鉄に乗ったときは流石に驚いた。(ただし時間に鷹揚なのは中国だけ

の話ではないけれども) 料金は316元(当時のレートで約5千円)である。大連駅から長春駅間は約700kmある。たとえば東京―新潟間は330kmで、料金は片道約1万円かかる。日本の新幹線と比べれば格段に安い。中国国内のすべての高鉄に乗ったり見たりしたわけではないが、どの高鉄も車体は汚れの目立つ白色で「和階号」と書かれて変わり映えない。路線により形やデザインを変えるという発想は無いのであろうか。いろいろ変えれば「トリ鉄」が喜んで中国に写真を撮りに来るのではなかろうか。ハルビンが終点のこの路線は、大連駅をスタートすると平原の中を殆どとうもろこし畑とポプラの防風林が続くが、風景に変化がなくすぐ飽きてしまう。車内は綺麗で網棚もあり、トイレは飛行機と同じような構造で、他の急行や普通列車の設備とは格段に違う。欠点をあげるとすれば、どの高鉄の窓ガラスも車体も汚れていて気になる。なぜ自動洗車機を設置し汚れを落とさないのか不思議である。清掃するだけでイメージはかなり良くなるのにと高鉄に乗るたびに思う。

私の乗った高鉄は、珍しく定刻どおりに12時48分に静かにホームに止まった。しかし折角定刻通りに到着したのに彼女を見つけるまでが一苦労であった。事前にお互いの服装まで微信で確認していたのに……。高鉄から降りて乗客がぞろぞろ歩く方向についていくとそのうち広いコンコースに出た。多くの人々が行き交っていた。切符は記念にもらえるので改札口はないであろうとは思っていたが、東京駅の「銀の鈴」のような出迎えの人と出会える場所があるだろうと簡単に考えていたのだ。長春駅はとにかく大きな駅になっていたと思う。なにしろ7年振りなのである。地下鉄、軽軌電車、バス、タクシーなどの標識はあちこちにあるが一体どこに行けば会えるのか皆目見当がつかない。会えなければ微信で交信すればいいと、これまた簡単に考えていたが駅構内はWi-Fiが使えると



浄月潭で于士淇さんと



丘の上にロケット発射台のような展望台があった。

ころがない。駅員に聞いても要領を得ない。スムーズに長春まで来たのに会えず仕舞いで大連に帰る羽目になるのか、という不安が脳裏をよぎった。それでもと気を取り直し、コンコースを行ったり来たりするうちにようやく于士淇さんにバッタリ出会った。お互いホッと胸をなでおろした。

于さんは、まず昼食を、と言ってマイカーに乗るように勧めた。彼女は「中国はどこに行っても車の運転が乱暴ですが、中でも長春は乱暴です。」と笑いながらも上手に車の流れに乗って、とある中華料理店に連れて行ってくれた。とても美味しい料理を食べながら積もる話が続いた。食後目的地に車を走らせ、浄月潭正門横の駐車場に着き30元の入場券を買って中に入った。

ここで浄月潭の紹介をしたい。場所は、長春市浄月観光経済開発区にあり、市の中心部から12km離れたところにある。面積は実に83平方キロメートルで東京ドームの6400倍、といってもピンと来ないくらい広大である。中国最大の人工森林公園であり、国家5A級観光地である。なぜ浄月潭という名称がついたかといえば、公園内に大きなダムが造られたわけであるが水を蓄えた後の形状が月の形であったためという。「潭」という字は辞典によれば、〈深い水たまり、よどみ、淵〉等と出ている。正門から10分くらい歩いたところに巨大な堤防があり、何十段もの石段を登って堤の上に立つと目の覚めるような光景が広がるのだ。藍色の澄んだ広々とした湖が空の青さと一体となってまるで別世界である。〈深い水たまり〉といった光景ではない。

台湾に行かれた方は、島の中部に「日月潭」という有名な観光地をご存知と思う。浄月潭は、この日月潭と姉妹潭と称されているそうだ。昭文社発行のガイドブックによれば、「日月潭」は約200年前に狩りをしていたツォウ族の若者たちが偶然に発見したとされる山上の湖だそうである。海拔748mにあり、周囲24km・面積11.7km²で水深は30mのこちらは天然湖である。周囲を1000～2000m級の山々に囲まれ、霧が立ち込める朝夕は幻想的であるそうだ。名前の由来は、この地を訪れた清朝の将軍が湖面に浮かぶ光華島を指さし、「北側は日輪の如し、南側は月輪の如し」と語ったことからと言う。湖の形を地図で確認したが、どう見ても日輪や月輪に見えない形をしているのであるが……。余談になるが霧の日月潭は一度見てみたいが、それより私が見てみたいのは日月潭の南岸にある「玄奘寺」である。この寺には西遊記でも有名な玄奘三蔵の遺骨の一部が安置されているという。これは、1955年(昭和30年)に日台友好のためにさいたま市にある慈恩寺から分骨されこの寺に奉安されているとのこと。

話を前に戻すと、堤の先の丘の上にロケット発射台に似た一風をなす展望台があるのでそこに行くことにした。最上階からの人工林と湖水が地平線まで広がる眺めはまた格別で今日一日を感謝した。だいぶ陽が傾いて夕日が湖面を照らし始め、我々はこの光景を脳裏に焼き付けながら出口に向かった。于さんは、「帰りは長春駅から一つ大連寄りの長春西駅に送りますが、その途中で夕食を取りましょう」と言って有名な「東方餃子王」に連れて行ってくれた。なぜこの店を選んだかを尋ねると、「中国では昔から、〈上車餃子、下車面〉と言います。これから高鉄に乗られるのでこのお店にしました」と説明してくれた。中国・東北地方の習慣のようであるが、餃子の美味しかったのは言うまでもない。お土産に月餅までいただいた(中秋節は9月15日)。長春西駅からの高鉄は20時11分発の切符が取れたので再会を約して別れた。大連北駅には23時17分に到着し、そしてホテルに着いた時は翌日になっていた。(続く)

▶ ペンで闘うテル

中国大陸への侵略だけでなく、日本は新たな戦端を開きました。1941年12月8日、ハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカ、イギリス、オランダとも戦います。中国にいたテルは当時29歳、果敢にペンで闘っていました。6月には石川達三の小説『生きている兵隊』のエスペラント訳を完成させました。

『生きている兵隊』は1938(昭和13)年3月号の『中央公論』に発表されました。その前年の1937年7月7日の夜から8日朝、北京郊外の盧溝橋で日中両軍は衝突しました。いわゆる盧溝橋事件です。この事件を発端に、日本軍は北京・天津一帯を総攻撃し、8月には第二次上海事変が勃発、全面戦争へと拡大しました。

日本政府は当初、不拡大方針をとっていましたが、軍部に引きずられていったのです。言論統制は進み、作家たちは戦時協力に追随して現地に行き、戦意を高める従軍記を発表しました。盧溝橋事件が起こる2年前、第1回の芥川賞を受賞した気鋭の作家、石川達三も中央公論から派遣された特派員として従軍しました。しかし石川が他の作家と違うところは、赤裸々に日本軍人の悪辣非道な実態をこの小説で明らかにしたことです。

そのため、発表されるやいなや、内務省の通達により発売禁止、書店に並ぶ時間もなく、一般の人たちの目にふれることなく消えてしまい、戦前では幻の名作としてその存在が噂される作品だったのです。

▶ 周恩来も称賛したテルの活動

その頃、重慶にいた周恩来もテルの活動に目を見張りました。1941年7月27日、重慶の文化人たちが集まる席で周恩来はテルに対し、「日本

の帝国主義者はあなたを売国奴のアナウンサーと言っていますが、あなたは日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者です」と褒めたたえました。

10月には、テルと劉仁夫妻に初めての子ども、長男が生まれました。名前は、希望の星と願って劉星と名付けました。また、テルの散文集『嵐の中のささやき』も中国報道編集部より出版されました。上海以後からの回想記です。

11月16日の郭沫若生誕50周年を記念した際には、テルは重慶から発行していた『新華日報』に「暴風雨時代の詩人」を撰してお祝いしました。郭沫若はいたく感激し、テルが持っていた赤いハンカチに墨色で詩を書き、テルに贈っています。

はてしない四方は暗闇が広がり、
天空には群星が輝いている。

その輝きは雪を照らすには遠すぎ、
書を照らすにはそばの燈がありがたい。

(澤田和子「長谷川テルの足跡」『長谷川テル一日中戦争下で反戦放送をした日本女性一』「長谷川テル」編集委員会編・所収)

▶ 日本の敗北

1942年、テルの母よねが東京で亡くなりましたが、テルはもちろん知ることはありませんでした。闘うテルは全世界の反ファシスト統一戦線を結成すべく、タイプライターを叩き続けて、「全世界

の反ファシスト統一戦線の兄弟たちよ、われらの共同の敵を打倒しよう!」『現今の日本婦人の生活』「黎明の合唱」『国際青年祭のための題詞』などの原稿を『中国報道』や『新華日報』に発表しました。

そして1945年5月には、『戦う中国で』が重慶世界語通信教育社から出版されました。そこでは、劉仁の後を追って、上海、広州、漢口(現在の武漢)まで抗日戦線に従事した日々を綴っています。

第十回 エスペランティスト長谷川テルの人生③
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ!」

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおい よしひろ)

8月15日、ついに日本は中国に敗北し、米英にも敗北しました。テルは「反攻」の編集室でそれを知りました。雑誌「反攻」は、1938年漢口で創刊され、月二回発行されていました。主な内容は、抗日運動の呼びかけ、東北抗日義勇軍などの抗日闘争の実情を紹介するものでした。また編集委員には東北で著名な蕭軍など何十人ものものが招聘され、若者たちに大きな影響力を持っていました。そして当時の「反攻」の編集部と印刷所は重慶にありました。

重慶の街は勝利の喜びに沸き立っています。勝利を祝うたいまつ行列の中にいるテルの心はしかし、中国の人々とは違ってやはり複雑でした。

日本敗北後の9月11日テルは、「岐路に立つ日本」と題し、「祖国を離れて、すでに8年。祖国への思いは日本が以後、再び爆発しそうな火山になることなく、明るい颯爽たる島国であることを望む」という日本の未来への期待を込めた文章を書きました。

テルの心の中には、愛する肉親や友人たちがいる日本への望郷の念があったことでしょう。一度帰国したい、という思いもあったことでしょう。しかし、中国では勝利の酔いも冷めやらぬ中、中国共産党と国民党との内戦が勃発したのです。

▶ 劉仁の故郷へ出発

1945年9月18日、テルと劉仁は、国民党の指示により、反内戦工作に従事するために、東北（旧満洲）へ旅立つことが決まりました。11月、劉仁はテルと長男の劉星を連れ、まず漢口に移動しました。その時、テルのお腹には赤ん坊がいました。

しかし厳しい中国の状況は続き、1946年1月、東北への旅の途中、長男の劉星が国民党特務によって誘拐されました。しかし1月10日、共産党と国民党の停戦協定が成立し、劉星は夕刻、二人のところに帰ってきました。そして南京経由の船で上海に到着しました。

2月上旬、テルと劉仁は、上海より海路、北上

して中旬には劉仁の故郷に近い瀋陽に着くことができました。この瀋陽で4月、二人目の子ども、劉曉嵐（後の長谷川暁子）が生まれました。この時、劉仁の弟の劉介庸が、故郷から兄である劉仁の妻を連れてきたのです。

劉仁はかつて“結婚”していたのです。その事情について、テルには一切、説明がなかったようです。妻は楊春輝と言いました。この結婚については、中国封建制下の結婚のありようについて言及しなければいけません。

当時の中国では、両性の意思など関係なしに、親同士が一方的に結婚を決めてしまうのです。生まれてきた女の子は纏足をしました。5歳か6歳頃から足の指を裏側に折り曲げ、布できつく巻き上げるのです。自然な足の成長を止めさせ、足を小さいままにさせておくのです。私もかつて纏足をしていた女性が、お婆さんになってもよちよち歩きをしているのを見かけたことがあります。そして親がまだ小さい男の子を、家との関係でそんな娘を選ぶのです。

魯迅、郭沫若などの文化人たちなどもそのような結婚を強いられ、最初の妻とは早々に別れています。毛沢東、劉少奇、朱徳、賀竜などの革命家の第一世代なども、ほとんど最初の結婚はそのようなものでした。革命が成功し、新中国になった時、多くの革命家は新たに若い女性と結婚しました。

しかしこれは止むを得ない事情だったと解釈するのが人間的な感情だと思います。革命家の中では、周恩来だけが鄧穎超と若い時に恋愛し結婚し、終生ともに過ごしました。革命後、若くて綺麗な女性と新たに結婚しなかった男として周恩来が人気ある要因の一つとっていいでしょう。

劉仁も12歳の時、両親が一方的に決めた女性、7歳年上の楊春輝と結婚させられたのでした。この事実をもって劉仁は重婚していたとか、テルに嘘をついていたと一部の日本では言われたこともあったようです。しかし、これは中国の事情を知らない故と言えるのではないのでしょうか。（続く）

東西文明の比較 (11)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

縄文時代は平等社会だ、といわれてきました。確かに、このことは世界に類を見ない事象として誇るべきことだと思います。しかし、最近の研究では、階層といわれるほどではありませんが、統率者(リーダー)的な存在があったようだとされるようになりました。

例えば、大きな獣の群れや魚の大群を大がかりに、効率よく捕獲するためには、多人数による規律のとれた、組織的な行動を必要とします。そのためにはリーダーと役割分担が不可欠です。おそらく、経験豊富な長老がリーダーになっていたのではないのでしょうか。

狩猟や魚捕りなどにはそれぞれ、巧みな集団や人々がいて、多くの人々をリードしていたにちがひありません。

集落の設営という大事業も同様なことがいえそうです。土地の選定や造営、建物や濠・溝・柵などの建設、道の敷設など、大規模な土木工事を必要とする状況が確認されています。これらの工事には、計画を立案・設計し、役割分担を指示し、施工管理し、成果を評価・褒賞する役割を担う人がいなければ、大事業は成し遂げることは出来なかったでしょう。つまり、役割に応じて仕事を分担する多くの人々によって構成された階層社会や集団が形成されていたのです。三内丸山遺跡などでは、大型建物や環状配石墓に4.2メートルの規格的な柱の間隔や環状配石が設定されています。この事実は、遺跡の建設作業に設計図と縄文尺が存在し、それぞれ分担して作業をしていたことが想像されます。

ただし縄文時代の階層は、一般的に男女の別、年齢別の階層、生業ごとのグループ、出自によるグループなどの区分がほとんどで、「上下に固定した階層」ではなかったようです。

墓地・墓・副葬品から見た階層

「散骨」とか「公園墓地」という新しい形態の埋葬法がしばしば話題になります。これは、子や孫に迷惑をかけたくないという最近の傾向ではないでしょうか。では、縄文時代はどのような埋葬法だったのでしょうか。

墓地は「現世における集団内での関係(地位など)を、死後の世界に反映させるもの」だったと考えられます。墓の構造や大きさ、副葬品は、死者の生前における集団内での地位や役割などを示しているのです。三内丸山遺跡の例を挙げてみましょう。

1. 集落の北と南の出入り口に道の両側に沿ってならぶ墓群
2. 集落西部の奥まった丘の傾斜面にまとまって営まれた土坑墓群
3. 南西の道に沿った丘の斜面に一列に並ぶ環状配石墓
4. 集落内にまとまって点在する乳幼児甕棺(埋葬土器)

なぜ、4タイプの墓が存在したのか、そこには何か区別する理由があったと考えられます。

注目するのは、3の環状配石墓です。長軸2メートルほどで、幅のある大きな墓穴とその上に4.2メートルの規格的な環状配石がのせられています。三内丸山遺跡では縄文中期の後半(約4000～4500年前)、周辺の集落を統合して、大規模の集落になりました。そこで集落をまとめるために、大きな権力を持ったリーダーが誕生し、環状配石墓はそれらのリーダーのものであることが確認されています。

また、東北地方南部、岩手県西田遺跡では、縄文中期の環状集落の中央広場に墓地が環状に営まれています。そのほか、関東や中部地方でも環状集落の中央広場の墓地の一角から、そこにだけ玉類・耳飾りなどが副葬された墓が多く発掘されています。いずれもムラのリーダーたちの墓であり、それらのリーダーは世襲されていたと考えられます。

縄文絵画や土偶にシャーマン

縄文人は絵を描いたり、具体的な像を表現するこ

とは余りありません。縄文人の最初の絵は愛媛県上黒岩の岩陰遺跡から発見されました。数センチの扁平礫に刻まれた線画です。土器や土偶に表現された人物は、いずれもシャーマンなどの特別な人物であったと思われます。

貧富の格差をつける階層はなかった

縄文社会の階層化について、狩猟や土木工事などの面と、墓や墓地、絵画などから考察してきました。その結果としていえることは、縄文社会においては極端に突出した階層はなかったということです。

先に挙げた作業で、経験や能力によるゆるやかな階層は存在し、代々世襲されたことはあったようですが、固定的な「上下関係」はありません。その理由をいくつか挙げてみます。

1. 集落内に、溝や堀などで区画して特別な場所を占有する住居などが無い。
2. 特別な構造や規模、家財道具や財産を置く建物がない。
3. 生業や各種作業には、役割分担があった。
4. 呪術を司る者(シャーマン)はいた。
5. 一人一墓の規格にほとんど差の無い墓があった。

縄文時代に争いはなかった…私見ですが

1万年以上続いた縄文時代は、極めて平穏な時代だったと言われます。このことは、世界でも注目されてきました。ではなぜか？

最近、縄文人のDNA鑑定から我々日本人のルーツがわかり始めました。まだ初期の段階のようですが、従来の考え方が変わるような出来事です。

その報告によれば、従来、旧石器時代人として存在が確認された人々は、「東アジア人^{注)}」といい4万年前に住み着いていました。この人たちが縄文人のルーツだそうです。その後、1万3000年前頃から、新たに「北東アジア人」と「東南アジア人」が相次いで日本列島に移住してきたといえます。それらの人々が混ざり合って現在いわれている「縄文人」ということだそうです。このことが事実とすれば、先住の「東アジア人」、後続の「北東アジア人」と「東南アジア人」の出会いはどうなシーンだったか、想像す

るだけで身震いします。

自然界にある豊富な食糧の調達方法は、先住の「東アジア人」が教えたでしょう。見よう見まねで「北東アジア人」と「東南アジア人」が、それらを学び、安定した毎日を送ってきたのではないのでしょうか。

時代を下って弥生人が日本列島に来たときのことを考えれば、状況の違いが分ります。弥生人とはどういう人たちか。私が学んだ通りであれば、彼らは「争い」を知っていたということです。当時の大陸は「春秋・戦国」の時代でした。そこには「生きるため、豊かになるため」に、権謀術数の争いが日常茶飯事であったはずで、そうした争いから逃れて平和な日本へ逃れてきたともいえるのではないのでしょうか。

一部の説では、争いごとを知っている弥生人という渡来の人々は、争いを知らない縄文人という先住民を蹴散らして山奥に追いやり、平地に水田を作って稲を植えた、といえます。

しかし、最近その説は少数意見になったようです。その理由の第一に、そんなに大量の渡来人が一緒に来たという証拠がない。第二に、遺跡から縄文・弥生の土器などが一緒に発掘されていること。これは縄文人と弥生人が仲良く共同生活をしてきた証拠である、というものです。異なる種族が仲良く共同生活する伝統は、遠い昔から続いていたことは間違いありません。こうした日本の伝統をもっと「大きな声」で伝えてもいいのではないのでしょうか。

注) 個々に挙げた「東アジア人」「北東アジア人」「東南アジア人」は、概念的な名称です。イメージするために、下記を参考にしてください。

東アジア(人)：ユーラシア大陸の東部にあたるアジア地域を指す。北西からモンゴル高原・中国大陸・朝鮮半島・台湾・琉球諸島・日本列島を含む。地理的区分では、北は天山山脈、モンゴル高原、アムール川まで、南は雲貴高原、西はチベット高原ヒマラヤ山脈までをいう。

北東アジア(人)：この地域の中心はモンゴル。中国・東トルキスタン・チベット、旧満州などに居住した民。

東南アジア(人)：大陸部ではベトナム・マレーシア・タイ、フィリピン・インドネシアなどの諸島に住む民。2～3万年前の後期旧石器時代から、洞窟や岩陰に人間が生活した痕跡を見る。

フィリピン滞在記 ⑱ (最終回)---セブ島とカオハガン島を訪ねて

ルソン大学日本語教師 為我 輝忠

ついに11月8日の夕刻日本へ帰国した。楽しかったことも大変なこともたくさんあったが、ともかく帰国して現在2か月近くになる。前号で記したように、帰国少し前にセブ島へ出かけた。セブ島と共にこの近くにあるカオハガン島にも行った。カオハガン島には以前からマニラに住む知人から行かないかと誘われていたので、日本に帰る前に是非ともここには行ってみたいと思っていた。

カオハガン島は丸ごと、ある日本人が所有する島で、周囲20分も歩けば一周してしまう小さな島である。東京ドームくらいの大ささしかない。これまであまりこの島に関する情報がなく、どのように行くのがよいのか分からないでいたので、渡りに船とばかりにその誘いに乗ってしまった。

セブ島には10月27日に着いた。マニラからLCCのエア・アジアで飛び、1時間半ほどであったという間に着いてしまい、マクタン島にあるセブ・マクタン国際空港からセブ・シティへタクシーで移動した。カオハガン島へは3日後に行く約束だったので、まずは予約してあったホテルに滞在した。セブ島と言えば、リゾート地というイメージが強いが、本当のところこの周辺には観光客を対象にしたリゾート地はない。かなり離れたところに行

かなければならない。今回はそのようなところは行かずに、セブ・シティに滞在することにし、前半2泊、後半3泊した。その間にカオハガン島へは2泊の予定であった。

前半はSummit Circle Sebu、後半はHarold's Hotelというホテルに滞在したが、どちらも街の中心部にあって、どこへ行くにも便利なホテルであった。セブ島は2回目の訪問でなので、前回訪ねたところは省き、今回は博物館、美術館、教会を中心に回ってみた。セブ・シティ博物館、スグロ博物館、オスメニャ記念館等の博物館やChurch of St. Thomas Villanuera, Church of St. Joseph the Patriarch, Redemptorist Church, Bradford Memorial Church, United Church of the Philippines等の教会を訪ねた。セブ・シティは人口60万を超え、大都市といった具合で、歩いていると、マニラにいるのと大して変わらなかった。

カオハガン島には10月29日から31日までの2泊3日で滞在した。マニラから来た知人と空港で待ち合わせ、マクタン島のマリコンドン港まで車で移動し、その後は船で島に渡った。通常この島へは定期船のようなものはなく、あらかじめ連絡をして迎えに来てもらわなければならない。30分ほどドーマー船に乗ったが、しばらくすると、サンゴ礁で出来た島が見えてきた。平べったく、ヤシの木で覆われただけで、他に民家が海岸寄りに固まってあるだけであった。

この島は崎山克彦氏が所有する島で、彼はゲストハウス(カオハガン・ハウス)を経営し、島の人々に働く場を提供したり、女性にはキルトを作る指導をしたりして、収入を得る機会を与えている。この島で作られるキルトは素晴らしく、最近では日本でも売られているそうだ。彼はもともと出版会



カオガハン・ゲストハウスの母屋

社に勤めていたが、60歳の時に辞めて、フィリピンに来て、この島が気に入り1000万円でこの島を買取ったそうだ。彼の『何もなくて豊かな島—南海の小島カオハガンに暮らす』(新潮社)という本を何年か前に読んだことがあり、大いに感銘を受けた。それで一度来てみたいと思っていたが、やっとその願が叶った。帰国後、『南十字星に針路をとって一ヨットで巡る何もなくて豊かな島々』や『青い鳥の住む島』を購入して、さらにこの島のことや崎山氏のことに興味を持った。

今回崎山氏が経営するゲストハウスに宿泊した。ゲストハウスと言っても電気はなし、バストイレも屋外にあり、不便極まりないところであったが、不思議と心地よさを感じた。滞在中は島の中を歩いたり、島の人々の家々を訪ねたり、海岸でボケッとしたりして、観光施設等がない、正に何も無い島の素晴らしさを堪能した。食事は周辺で獲れた魚介類を中心にしたもので、素朴な味わいがよかった。ただ野菜類は島で栽培していないためマクタン島から購入してくるそうだ。それに水道はない。飲料水は他から運んでくるが、日常使う水は雨水をためたものだそうで、シャワーやトイレは使えるが、気を付けて使わなければならなかった。島民の家を訪ねると、どこでも大きなドラムカンが数個置かれていて、雨水をためるために使っているよ

うだった。

島ではどこに行っても心地よい風が吹いていて、エアコンなど必要ない。夜間は一段と涼しい風が吹き、涼しすぎるほどであった。エアコンが

置いてある家など一軒もない。すべてが自然のままである。この島にいと、時間の流れがゆったり動いているような感じがする。ここにいる間は時計はいらなかった。すべてを時の流れるままに任せていればそれでよかった。都会の生活で身の回りに付いた汚れが取り払われたみたいである。もっと長くいたいとさえ思った。

しかし、いいことづくめではなかった。最近、島には少しずつながら観光客が来るようになり、かれら目当ての屋台や食堂ができ、騒々しくなってきた。この島にやって来る観光客は中国人が多いようだ。現に私がいる間にも彼らの姿を見かけた。また、人が増えることによってごみが大量に発生し、島のあちこちにゴミが放置されていた。島にはごみを処理する施設がないのだ。この島もいずれは本格的に観光化し、人がたくさん来るようになるだろう。出来るならば、ほどほどの観光客が来る程度で、今の島の静け

さや素朴さを残して欲しい。これは一人の旅人の願いに過ぎないだろうか。数年後にはまた来てみたと思う。どんな風になっているか見てみたい。

(終わり)



カオハガン島を丸ごと購入した崎山克彦氏



カオハガン島の遠景(崎山氏提供)

スリランカ民主社会主義共和国は、北海道の8割位の広さである。「ジャフナ」はスリランカ9州の1つ、北部州に在る。その変遷を辿っていくと、実に2500年の歴史を持っている。民族や言語・宗教が絡み合うスリランカを構成する特殊な地域であろう。内戦時のシンハラ人とタミル人の紛争激戦地であった。16世紀までの一時期には、ジャフナ王国の都があった。ジャフナにはかなりのヒンドゥ教徒が定住していた。

ところで、『大王統史』第1章「如来来降」に、釈迦成道後5年目のチツタ月(4月)新月の日、マホーダラ王とチューロダラ王の争いを止める為、ナーガディーパ(現在のジャフナ半島)に、釈迦が上陸されたことが記されている。又、第19章「菩提樹来島」には、アショカ王が仏滅後218年に即位し、その18年後マーガシラ月(12月)満月に、王女のサンガミッタ比丘尼が菩提樹の分け木を持って、ジャンブコーラ(現在のジャフナに在る港)に到着されている。ルーツを辿れば、インド大陸の民族と宗教である。その底辺は、仏教とヒンドゥ教を中心とする思想が混在している。今日、残されている遺跡や顕彰碑は、如実にそのことを語っている。紛争と融和を象徴されたものである。私は敢えて、融和(ハーモニー)をタイトルに選んだ。

民族の抗争

紀元前483年にシンハ(獅子)の子孫と称するヴィジャ王が、シンハラ人を連れて来島し先住民を征服したという建国神話から、スリランカが始まる。以降、王政が敷かれ、数多くの変化を遂げながら王国が、1815年、イギリスの植民地になるまで約2300年も続いた。紀元前4世紀にアヌラーダブラに主都が置かれ、次々に困難なことに遭遇したと云う。紀元前3世紀にマハー・ヴィハー

ラ(大寺)を建立、以来、歴代の王の庇護もあって仏教が広がって行った。

紀元前2世紀に南インドよりタミル王朝の移民がシンハラ王朝に侵攻を始めた。B.C.164年、当時のドゥッタガーマニー王がタミル人からアヌラーダブラを奪還、ルワンウェリ・サーヤ大塔を建造した。B.C.89年、ワラガムバーフ王がタミル人に再び奪われたアヌラーダブラを取り返し、石窟黄金寺院を造った。4世紀、仏歯がアヌラーダブラにもたらされた。A.C.478年、カーシャバ王がシギリヤに遷都し、495年に陥落、王都はアヌラーダブラに戻された。1070年、ポロンナルワへ遷都するまで、タミル人が乗っ取った王朝が続いたり複雑を極める民族の歴史はここから始まったといえる。

13世紀タミル人がジャフナ王国を建て、シンハラ王朝は南に追われた。15世紀キャンディに遷都したが、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地となり、ヨーロッパ文化が流入した。スリランカ独立後、1956年シンハラ人とタミル人が各地で暴動を繰り返し、数多くの犠牲者を出した。

1983年に内戦激化し、2009年、内戦が終結して今日に至っているが、ジャヤワルダナ第2代大統領(1906～1996)が第二次世界大戦後のサンフランシスコ講和会議での演説で語った偉大なる仏陀のメッセージは、内戦当時のスリランカに届かなかったのであろうか。「憎しみは憎むことによって消えず、愛することによってなくなる」と。

内戦の犠牲者

ジャフナに行ってみたいと言ったら、パスポートのコピーを提出するようにと、スリランカ側の旅行社から要請された。内戦は終わっていても外国人には渡航制限があった。ジャフナはタミル人

が多く住んでいて住民はヒンドゥ教徒が絶対多数であるとのことによるそうだ。建物には銃痕^{じゅうこん}が残り、まだ地雷が埋められたままの所もあるらしい。インフラもろとも都市が破壊され、仏教寺院も崩壊してヒンドゥ教の寺院に変わっていたりするという。車の中から眺める景色は、犠牲者や傷痕と入れ替わるように平和が少しずつ近づいている気がした。ヴァヴニヤの廟の辺りで駐車した。内戦時に、或る若い兵士が身体に爆弾を巻きつけてゲリラの戦車(ブルドーザ)に飛び込み3000人の命を救った。その英雄像が祀られている廟に上がり、蘭の花を捧げ合掌した。この像が平和のシンボルとなって、永久に語りかけてほしいと願った。

どこか南インド風

2015年3月初旬とはいっても熱暑の極みで、ジャフナに向かって幹線道路を直走りに走った。町々に掲げられている看板の文字が、コロンボやキャンディの文字と違っている。「あれ、なーに？」と指差すと「タミル語だよ」と同行のソーマシリ師が答えた。家並も何処となく泥くさくて野暮ったい感じではあるけれど、懐しい風景に出遇った気がする。昔風の商店が連なっているけれど、却って趣があって南インドに行った気分になった。

北部州はドライゾーンで乾燥度が高く、窓を開くと熱風が襲ってきた。「ここはね、ココナツ椰子が育たない。固い実をつけるパルミナ椰子の林が景観を特徴づけているんだよ」とのこと。ならば植物が育つ種類も限られてくるのであろうと思いきや、地下水が豊富なので多くの野菜や豆類が栽培されているとのことである。ベジタリアンが多くて、料理もスリランカ料理というよりも南インド色が濃い。

途次、食事をする事になった。ロール・ワディ・パティス・カトレッツといったメニューは、タミル人の特色あるものだと言われながら来た。食堂で働くタミル人に接したが、多少浅黒い肌のタミル人の感情表現には、日本人に似たところ



カンタロダイ仏教寺院遺跡 ジャフナ市街の北郊にあり、50を超える直径2メートルほどの小仏塔と仏足石がある。約2000年前のものとする。(画像は「[Google Panoramio](#)」、説明は「[goo辞書](#)」より)

ろがあった。南インドのタミル語と日本語にも共通点を指摘される学者がおられるが、興味深いことである。

ジャンブコーラの仏教風景

ジャフナのジャンブコーラ港? にやっと着いた。何時間を要したであろうか。新しい仏教舞台に出遇ったという感じがした。サンガミッタ比丘尼がインドから菩提樹を運んできた所として、新しい寺院・仏塔・記念碑・顕彰碑・比丘像などが建てられていた。菩提樹が金色の柵に囲まれて、青青と茂っていた。それらをじっと見ていて、胸が熱くなった。何処も彼処も、人類の歴史は破壊と再生の繰り返しで続いてきたと思う。もうこの類^{たぐい}の争いは終わってほしいと願わずにはおられなかった。

12月の満月の日、サンガミッタ祭りが催される。ウエサクやスカンダ・エザラペラヘラなど、シンハラ^{タミル}の仏教とタミルのヒンドゥ教の信仰の共通点があり、融合もみられる。文化や風俗が接触して培われたものが、脈々と受け継がれている。内戦が終了している今こそ、シンハラ文化とタミル文化が共存共栄に向けて新しい文化を創出して欲しいと願う。スリランカに根強く伝わる仏の教えこそ民族融和の基点^{きてん}となるだろう。

Wish You All the Best in 2017

'わんりい'の皆様

East Face and North Ridge of the main-peak 6250m

Kenzo Okawa

Four Girls Mountains N.R. & Queen Valley in the Trans-Himalayas

中国四川省で四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問として活躍の写真家大川健三氏より、「わんりい」の皆様には年賀状を頂きました。

明けましておめでとうございます。

2016年は例年よりも夏がより暑く雨期明けが1か月以上遅れました。乾季入りの遅れは5年続きで、気候がシフトしたのかも知れません。

今年も春節の頃に訪れる暖かい春を心待ちにしています。



大川健三氏

町田市薬師池公園にて

良いお年になりますよう、ギャロンの地よりお祈り申し上げます。

中国の笑い話 30 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第94話：稲妻と雷鳴

先生「みんな気が付いているかな？ 稲妻は雷鳴が聞えるより前に見えるんだよ」

学生「先生、それは当然ですよ。人間の眼は耳よりも前についているからでしょ！」

第95話：電話番号

ある生徒が先生に訊いた。

生徒「先生、コロンブスの名前の下に '1415 ~ 1506' と書いてありますが、これは何を表しているのですか？」

先生が答える前に、ジミーが立ち上がって、素早く答えた。

ジミー「そんなの分るじゃないか！ コロンブスの電話番号に決まっているよ」

第96話：戦争の回数

先生「15世紀に、スペインでは何回戦争があったでしょう？」

生徒「6回です」

先生「6回は、どんな戦争でしたか？」

生徒「第1次、第2次、第3次、第4次、第5次、第6次です」

第97話：人差し指と中指

教授が、大学生を連れて実験室にやって来た。教授は、尿をためたビーカーを指さしながら学生たちに言った。

「君たちが優秀な生物学者になろうとしたら、勇敢な心と、鋭敏な観察力を持たなければならない。君たち、私がやるのと同じようにしてご覧」

と言って、尿の中に指を浸して、それを口へ持って行って味わった。連れられてきた学生たちは、驚きながらも、皆遅れじと指を浸して、口に入れた。ある学生は顔をしかめ、ある学生は吐き出した。中には、朝食べたものも吐いてしまった学生もいた。

それを見て、教授は笑って言った。

「君たちが勇敢なのはよく分かったが、観察力は不足しているようだ。私は人差し指を尿に浸して、中指を口へ入れたのだよ！」

第10回市民協働フェスティバル「まちカフェ」2016年度 2016年12月4日(日)10:00～16:00 場所:町田市役所全館

町田市内で活動するNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)が一堂に集い、「出会い」「知り合い」「深め合う」まちだをテーマに、活動発表などを通じて交流を深めるためのイベントが毎年町田市役所全館を使って開催され今年で10回だそう。'わんりい'の参加は、昨年、町田市市民部市民協働課より声が掛って参加したのが初めてだった。

昨年は祭の様子が分からず、中国茶や中国黒酢やピータンなどの物品販売で参加した。が、'わんりい'は長年「文化」(主としてアジアの)をキーワードにして活動してきた。やはり活動の趣旨に添ったものにしたいと思い、今年は「中国文化を楽しむ」をテーマに、中国の庶民的な遊び・^{きり}剪紙(ハサミを使って剪る切り絵)と来年の干支を画く水墨画の体験で参加した。

ハサミと色紙があれば気楽に遊べる剪紙は予想以上に人気だった。10月末に何さんと一緒に剪紙で遊んだのが切っ掛けで、同じ図柄が何枚も一緒に剪りだされる面白さや一枚の紙を幾重にも折って模様を剪って広げる時のワクワク感、ハサミに先に神経を集中させて剪る緊張感などの魅力にすっかりハマって就寝前に遊んだ。作品という程のものではないが、それらを何枚か看板代わりにパネルに貼った。他愛ない代物だが何枚か纏めて貼ったのが見る人の遊び心を刺激したようだ。折り紙つきで100円というのも手軽だったかも。

午後の水墨画で干支を画く体験は剪紙に比べると、その芸術性からやや敷居が高かったらしい。自分が画いて体験するという気持ちより、他人がどんなふう画くのかという好奇心の方が勝ったようで、描く人より覗く人の方が多かった。

けれども、大人の体験者に小学生何人かが体験に加わり実際筆を取って描いてみたりという事もあって、'わんりい'として今年は午前・午後とも、会の活動を紹介でき



いろいろな剪紙を貼りつけた 'わんりい' の看板
きりがみ



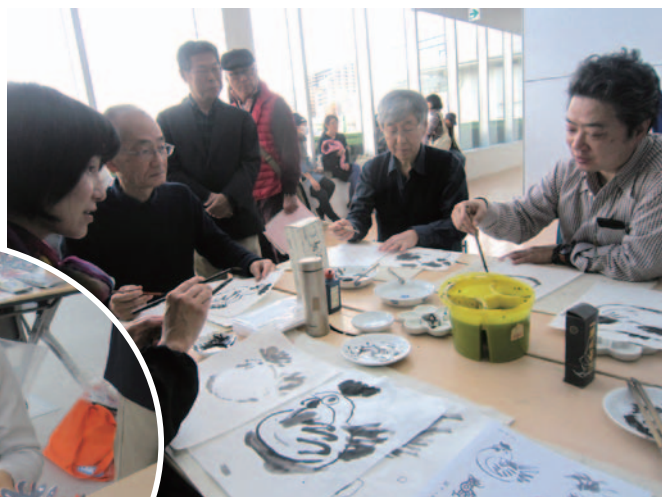
モンの刺繍小物を並べた

← 何さん作成の切り紙を利用した飾りもの

た意義ある参加だったと思う。

剪纸の型紙を沢山用意されてご指導くださった何媛媛さん、水墨画体験の道具を持参して横浜からはるばるお出でくださった日中水墨画協会会長の満柏画伯に深く感謝したい。

(報告：田井光枝)



器用にハサミを使う女の子➡



開いたらどんな模様が飛び出すのかな



水墨画体験風景(上下2枚)

◆'わんりい'料理の会

〈お母さんの愛を味わう 中国おやきの会〉

講師：呉躍鳳さん 場所：麻生市民館 2016年12月12日(月)

「中国おやきの会」の呼び掛け文でも書いたが、今年4月、留学生を招いて 'わんりい' 会員の山田賀世さんに日本の太巻きの講座を開催した折、ご参加くださったイエリンさんのお母さんの呉躍鳳さんが、小麦粉と砂糖と油少々だけで、鮮やかな手つきで焼いて下さった「糖酥餅」と「金絲餅」が忘れられないでした。是非'わんりい' 周辺の皆様に紹介したいと思い、今回は中国東北地方でよく焼かれる肉餡入りの「餡餅」を加えて開催した。

今回の開催が気忙しい12月という事やインフルエンザの流行もあって、参加予定者のキャンセルが多くてたのが残念だったが、人数が少なくなったので、少々コツが必要な、中国のおやきの粉捏ねなど各人全員が体験するいい機会になった。「餡餅」の餡は、包子にも餃子の餡にもそのまま転用できる。



「中国おやきの会」講習風景

包子のように発酵させる手間がかからないし、餃子のように数を沢山作らなくてもよいし、思い立ったら小麦粉さえあれば、餡の内容は少々異なってもありあわせの材料で準備し提供できるという強みがあ

る。とても手軽だし庶民的な家庭料理としてお米が取れない中国東北地方ではよく食べられているのは当然かも。冷めて少々固くなっても今はオーブントースターという強い味方が焼きたての味を復活させてくれる。実際、この日に焼いた餡餅を頭割りしてお土産に頂いて翌日のお昼に頂いたが香ばしくてとても美味しかった。

用意の餡が少々足りなくなっても、皮用の材料が残った時は、今回の「中国おやきの会」開催の動機になった「糖酥餅」や「金絲餅」を焼こう。特別な材料はなくても、ほんのりした甘みの糖酥餅やほろほろとパイのような口どけの金絲餅に粉食文化圏の流石の知恵を感じると思う。

(報告：田井光枝)

※‘わんりい’ HP にレシピの掲載をします



↑それぞれが中国のおやきに挑戦したので、少々遅いランチタイムになったが大満足の笑顔で終わった。

ランチのテーブルは、手作りながらカラフルな料理が並んだ。 →



金絲餅の成型の仕方



餡餅 (餡の包み方→焼き方)



Emme・オープンボイス 合同コンサート 参加

2016年12月10日(土) 於:高田馬場・四谷天窓 Comfort

今年も、Emme講師が指導するボイストレ講座による合同のオープンボイス・コンサートが高田馬場・四谷天窓 Comfortで開催され、'わんりい'の講座から13名が参加、「ひとつの種」(作詞:松本MOCO、作曲:流星とEmme)を心を込めて歌いました。他のグループの方々の個性豊かな素敵な歌声に 歌の力の素晴らしさを感じた楽しい時間でした。(報告:鈴木千佳子)



「ひとつの種」(作詞:松本MOCO、作曲:流星とEmme)を発表するメンバーたち

'わんりい'翻訳勉強会・報告 日本連誼協会から感謝状を頂きました

雲南日本雲南連誼協会と言う特定非営利活動法人があります。初鹿野恵蘭理事長が2000年に設立して、雲南省の少数民族に対する教育支援を様々な形で実施しており、その活動の中に、日本から、少数民族の女子高校生に対する一対一のサポーターを募り、3年間、彼女たちの学校生活を支援する活動があります。

被支援者の女子高校生は1学年毎に100名で合計300名おり、折に触れ、日本のサポーターの皆さんに中国語の手紙を書いて来ます。一昨年春、'わんりい'有志・15名ほどが「わんりい翻訳勉強会」(以下「翻訳勉強会」)を立ち上げ、以来、彼女たちのお手紙翻訳のお手伝いをしています。

支援者が決まった時、クリスマス・新年のお祝いカード、学期ごとの報告など、女子高校生からの手紙はドカンと纏まって届きます。「翻訳勉強会」は、名古屋地区の翻訳ボランティアグループや、個人的

な翻訳ボランティアの皆さんと共に、出来るだけたくさんお引き受けするようにしています。

時には、納期がかなり短い時もあるのですが、「翻訳勉強会」メンバーの皆さんは非常に協力的で、過去2年間で、相当数のお手紙を翻訳できたと自負しています。

今年、12月17日の日本雲南連誼協会の忘年会の席上、思いがけず、'わんりい'にも、手紙翻訳ボランティア活動に対して感謝状が贈られるの通知が届き、メンバーの一人である崔貞(黒田真子)さんが、忘年会に参加し表彰状を受け取りました。

「翻訳勉強会」の活動参加の皆さまに日頃のご協力を厚くお礼申し上げます。また、中国語

の手紙の日本語翻訳に興味をお持ちの皆様、是非「翻訳勉強会」に参加をお待ちしています。

● 問合せ: ukiuki65jppj@yahoo.co.jp (有為楠)

(報告:「翻訳勉強会」・世話人代表、有為楠君代)



特定NPO法人・日本雲南連誼協会からの感謝状を手に、協会理事長の初鹿野恵蘭さんと記念撮影の崔貞(黒田真子)さん(左)



講演中の馮学敏氏
(筆者撮影)

東京中国文化センターにて中国人写真家馮学敏氏の表記の写真展が12月6日から16日まで開催された。12月13日には「福建印象」という講演会があり、両方合わせて出掛けた。馮学敏氏は昨年「わんりい」の新年会に出席されているので、覚えている方もおられるのではないだろうか。

福建省福州には2011年から12年にかけて1年間住んでいたため、今回の写真展と講演会には大いに興味を覚えた。写真展は50点余りの作品が展示され、福清にある黄檗宗の寺院をはじめ福建の市井の人々の姿や烏龍茶の故郷の風景などの写真が紹介されていて、どれも素晴らしいものばかりであった。福建省は他の州に比べると、独特の風景や文化があり、こうしたものが今回の展覧会ではすべて紹介されていた。

講演会では写真展のテーマである福清の黄檗宗についてその歴史と日本にある京都宇治の黄檗宗萬福寺のことが紹介され、さらにお茶との関係にも及んだ。途中、在東京中国大使程永華氏が来場され、2人の交友ぶりを示した。

【馮学敏プロフィール】在日中国人カメラマン。1985年、来日本。以来、撮影技術の造詣を深め、1999年、第36回太陽賞を受賞。中国・日本内外で多くの個展を開催。中国文化部から「世界華人傑出芸術家」の称号を授与されている。同じ風景、物事でも、馮氏の作品にはストーリーがあるといわれる。



展示作品「少数民族の女性」
(展覧会場にて筆者撮影)



選茶 (お茶の選別)
(馮学敏写真集「福建・烏龍茶的故郷」より)



品茶 (お茶の試飲)
(馮学敏写真集「福建・烏龍茶的故郷」より)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

【2017年1月・2月定例会開催日】

- ◆ 問合せ：☎042-319-6491 (わんりい)
- 1月の定例会：1月9日(火) 13:30～
- 2月の定例会：2月16日(木) 13:30～
- 場所：三輪センター・第三会議室です。

※ 尚、2月号の‘わんりい’は例年通りお休みします。皆様、どうぞよい年をお迎えください。

中国文化省が後援する中国文化ネットが主催の「快樂春節2016写真コンテスト」で、満柏画伯の「Descendants of Dragon」(龍の子孫)が、中国国内外・世界50か国余の国々から寄せられた2600作品を超える中から選ばれて一等賞を獲得しました。満柏画伯コメント「写真は2011年、横浜の中華街で撮った龍舞のワンシーンです。当時、息子が中華学校の幼稚園児で龍舞に参加しましたが、列の後ろだったので写っていないのが少々残念です」。 http://en.chinaculture.org/2016-11/16/content_907823.htm



《‘わんりい’ 掲示板》

●わんりい料理の会料理の会2017年1月

長野県のソールフード・おやきでほっさりしよう!

2017年1月12日(木) 10:30 ~ 14:00 町田市民フォーラム・調理室

長野県の郷土食といえば、真っ先に思い浮かべるのが「おやき」。小麦粉で作る皮は薄皮、もっちり、ふっくらと地方によって様々、そして具の種類も豊富。薄皮で具の種類も豊富。現在長野県青木村に生活の拠点を移された‘わんりい’会員の岩田温子さんに現地のおやきの作り方を指導頂きます。作り方が分かれば、おやきの中身はは創意工夫でオリジナルのおやきができますね。伝統的おやきの他現代的なおやきも加えて4種類、中国の包子とはまた違ったおやきの美味しさを味わってみましょう。

中国の皆様にも、この機会に日本の郷土色溢れるおやきを知って頂けたらと願ってます。是非、一緒に如何?

【メニュー】おやき4種類、和風サラダ、スープ、デザート

●参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※留学生は無料

●募集人数：15名 ●持ち物：エプロン 筆記用具

◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp 田井



第1回「雅・静筆墨～書画真情」中日書画展

<https://spc.jst.go.jp/cdb/event/detail/540>

【入場無料】

主催：中国文化芸術センター／中国文化センター

画家であり書道家として中国国内で知られ、数多くの美術展で入賞の王建涛、徐立東の両氏の作品に加えて日本人画家であり書道家である栄隈真鳳氏、吉田洋紀氏、高橋天山氏の作品及び日本在住の中国人書道家・高小飛氏の作品を展示する

2017年1月11日(水)～18日(水)
10:30～17:30(初日15:30最終日13時まで)

会場：中国文化センター

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-5-137 森ビル1階

▲会期中の【特別企画講座唐詩詩吟鑑賞会】

2017年1月16日(月) 14:00～16:00

オペラ歌手・程波氏(中国国家一級俳優)による唐詩の詩吟を古琴演奏家・高欲生氏の演奏と共に鑑賞する。尚、中国茶道も体験出来る。

※要申込但し、満席になり次第受付中止

※申込方法：①名前②電話番号③Fax番号④E-mailアドレスを下記・中国文化芸術センター宛に送る

◆Fax 03-5616-8823

◆E-mail: cac@jg8.so-net.ne.jp

第4回桜美林大学孔子学院 漢詩朗読・創作発表会

<http://www.obirin.ac.jp/kongzi/news/koushi/2016/20170128.html>

主催：桜美林大学孔子学院

会場：桜美林大学淵野辺キャンパス 2F202 教室

2017年1月28日(土) 13:00～17:30

▲13:00～14:00

漢詩講演会「続漢詩のことばー詩語の諸相」

講演者：佐藤保氏(お茶の水大学名誉教授元同学学長)
NHK ラジオ「漢詩を読む」講師他

▲14:15～17:00 朗読・創作発表大会

～最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞などの表彰あり～
発表申込：2017年1月20日(金)まで

詳細問合せ：E-mail: kongzi@obirin.ac.jp

☎042-704-7020(桜美林大学孔子学院事務局)

※終了後、懇親会有り(希望者会費：3000円)

●「漢詩朗読・創作発表大会漢詩創作事前講座」

■会場：同上(参加無料)

2017年1月14日(土) 14:40～16:10

漢詩は国語の授業で習っただけ「絶句と律詩の違いは?」「押韻・平仄とは何?」、奥深い漢詩の世界への第一歩をわかりやすくレクチャー。「漢詩朗読・創作発表大会」(2017年1月28日実施)への参加の有無にかかわらずどなたでも参加可

●講師：植田渥雄先生

(桜美林大学孔子学院公開講座講師、桜美林大学名誉教授)

●参加申込：1月10日(火)までに上記、桜美林大学孔子学院事務所へ

日中国交正常化 45 周年記念

上海歴史建築巡り写真展【入場無料】

<http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/9265>

主催：中国文化芸術センター／中国文化センター

世界有数の国際都市・上海は高層ビルが建ちながら一方、外灘に代表される地域には1920年代の洋式建築が残されており、その保護及び修繕が重要視されている。本展では上海市歴史博物館が所蔵の、静安、長寧、普陀の三地区の歴史建築を撮影した写真60点を展示する

▲会場：日中友好会館美術館

〒112-0004 文京区後楽1-5-3 ☎03-3815-5085

▲2017年1月18日(水)～2月12日(日)

10:00～17:00(初日14:30より開幕式)

毎週月曜日休館

【関連イベント】①、②は事前申込不要、参加費無料

①開幕式(申込不要)1月18日(水)14:30～

上海市歴史博物館の代表団が来日

②ギャラリートーク 1月18日(水)開幕式終了後

上海歴史博物館館員による作品解説

③歓楽春節ミュージアムミニコンサート(要申込)

出演：王明君(昭和音楽大学准教授、笛子・洞簫奏者)

座席：50席(立見は申込不要)

会場：日中友好会館美術館 *参加無料

※その他、色々イベントがあります

【問合せ&申込】

日中友好会館・文化事業部 ☎03-3815-5085

E-mail: bunka@jcfc.jp

‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。

年会費(4月～3月)：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 ‘わんりい’

入会時期によって割引あり。お問合せ：下記。

☎042-734-5100 又は E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲1月の講座：1月15日(日) 10:00～11:30
- ▲2月の講座：2月19日(日) 10:00～11:30
- ▲会場：まちだ中央公民館6F 第3・第4学習室
- ▲講師：植田渥雄先生

(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆わんりいの催し

**ボイストレーニングをして
日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- ▲1月24日(火) 視聴覚室
- ▲2月21日(火) 視聴覚室
- ▲時間 10:00～11:30
- ★動きやすい服装でご参加ください



●1・2月の練習曲：

「ひらけ」詞: Chang Jung/曲: Emme

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)

恒例！'わんりい'新年会日取り決定！！

2017 'わんりい'新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう

場所：麻生市民館・料理室

(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2016年2月7日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 (会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100



初心者のための【鶴川水墨画教室】

体験のお誘い

来年の干支「鶏」を描いてみよう！

講師：満柏(●日中水墨協会会長)

●場所：鶴川市民センター(町田市大蔵町1981 駐車場有)

小田急線鶴川駅からバス
「鶴川市民センター入口」下車

●曜日・時間：14:00～16:00

毎月第2、第4(月)

●体験参加費：1000円

(見学無料/
手ぶらで参加OK)

●問合せ：

☎042-735-6135

野島



'わんりい' 220号の主な目次

北京雑感110 北京、発展のスピード……………2
 論語断片(23)文質彬彬として、然る後君子なり……………3
 「漢詩の会」講座報告⑦「黄鹤楼」……………4
 大連・長春・丹東の旅(その4)……………6
 混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義X……………8
 東西文明の比較(11)……………10
 フィリピン滞任記⑩セブ島とカオハガン島を訪ねて…12
 スリランカ紀行⑭私の中のジャフナ・ハーモニー…14
 中国の笑い話(30)……………16
 大川健三氏・年賀状……………16
 わんりい活動報告「まちカフェ」(2016年度)……………17
 わんりい活動報告「中国おやきの会」……………18
 わんりい・ボイストレの活動報告……………20
 わんりい・翻訳勉強会の報告……………20
 馮学敏氏展覧会を拝見して……………21
 【トピックス】満柏画伯の写真が一等賞に……………22
 わんりい掲示板……………22・23・24